

ボリスとグレープの列聖

三浦 清美

1. はじめに―列聖のなぞ

ボリスとグレープはロシアにおいて最初に列聖された聖人である。10世紀初頭のルーシ（ロシアの古名）で政治的謀略に巻きこまれて命を失ったこの二人の王族は、それまでの東西キリスト教会の聖者の標準とはあきらかに異なっていた。ボリスとグレープは、長幼の順を慈順と守って、無抵抗のうちにその兄「呪われた」スヴァトボルクに殺害された。けっしてキリストへの信仰や徳高い生き方や学才に秀でていたわけではない。このために列聖の当初から、ボリスとグレープの聖性に疑義をはさむ声がたえなかった。

たとえば、『奇跡にかんする物語』（後述）では、二人の遺骸の移葬にかんする記事において次のように書かれている。「そして、彼らは教会に柩を運びこみ、安置し、柩のふたを開けると、教会は馥郁たる香りと奇しき芳香でいっぱいになった。そして、みなはこれを見ると、神を讃えた。一方、恐怖が府主教を襲った。なぜなら、彼はこの聖者たちをあまり信じていなかったからである。そして、彼はうつ伏してたおれ、赦しをもとめて聖なる遺骸に接吻した¹。」「説教」（後述）のなかにも同じ事件の記事がほぼ同じように書かれている²。

ロシア革命後パリで活躍した文化史家 G・フェドートフ（1886-1951）は、この事態を次のように捉えている。「彼らの列聖は疑いなくキリスト教上層聖職者、すなわち、ギリシア人府主教によっておこなわれたのではない。彼らはこの新しい奇跡成就者たちの聖人たるゆえんについて一定の疑いをもっていた。ギリシア人たちの懷疑は、当然のことと考える必要がある³。」

キリスト教を受け入れてまもないルーシにおいては、ギリシア人聖職者の教会にたいする影響力がつかったが、彼らはボリスとグレープの列聖にかんして、少なからぬ疑念をいだいていた。しかしながら、このもっともな疑念にもかかわらず、ボリスとグレープの列聖はルーシ側からなかば強行され、ビザンツ側もそれを追認せざるをえなかった。

なぜこのようなことがおこったのだろうか。状況は多くのなぞを含んでいる。まぎれもないのは、ボリスとグレープの列聖が後世に絶大な影響をあたえ、現代まで生き延びた点である。

列聖の以後（あるいは、それ以前にさかのぼって）、各都市にボリスとグレープを記念する教会が建てられ、二人の聖者を描いたおびただしい数のイコンが制作され、そしてなによりも彼らをモデルとして、チェルニーゴフ公イーゴリ（1147 年没）、アンドレイ・ボゴリュプスキー（1174

¹ Милютенко Н.И. Святые князья-мученики Борис и Глеб. СПб., 2006. С.324-327.

² Милютенко Святые ... С.388-391.

³ Федотов Г. Святые древней Руси. М., 1990. С.40.

年没)、トヴェーリ公ミハイル(1319年没)ら、多くの政治的敗者が殉難者(ストラストチェルプツィ)として列聖された。その最も新しい例は、ロシア革命で惨殺され、2000年にロシア正教会によって聖者の列に加えられたロマノフ朝最後の皇帝、ニコライ2世とその家族である。

現代でも、聖ボリスと聖グレープは自らを犠牲にして家父長的家庭秩序を守ったとされ、家族関係の守護者として民衆に篤く崇敬されている。ボリスとグレープ崇敬の根は深いのである。本稿は、ボリスとグレープがロシア最初の聖者としてなぜ列聖されなければならなかったのか、さらにこの列聖がどのような心理的メカニズムで後世に継承されていったのかをあきらかにすることを目的としている。

2. ボリスとグレープ殺害事件の史料

ボリスとグレープの暗殺事件をあつかった中世ロシアの文献は、11世紀の終わりから12世紀の初頭にかけて書かれた⁴。該当する作品を列挙し、これらについて概観しておくことにしよう。おもな作品は以下の四つである。

- ① 『過ぎし年月の物語』における「ボリスの殺害について」の記事⁵(以下、『年代記』と略す)。
- ② 『聖なる受難者ボリスとグレープの生涯と死についての説教』⁶(以下、『説教』と略す)。
- ③ 『聖なる殉教者ボリスとグレープに捧げる物語と受難と頌詞』⁷(以下、『物語』と略す)。
- ④ 『聖なるキリストの殉教者ロマンとダヴィデの奇跡に関する物語』⁸(以下、『奇跡にかんする物語』と略す)。

作品群のなかで殺害事件の経緯を報告しているのは①②③の作品であるが、そこで報じられる内容はほぼ共通しており、一貫性がある。それぞれの作品はまったく同じ事件を若干角度を変えて叙述したものと考えることができる。

もっとも精彩に富むのは③『物語』であり、中世ロシア文学のなかで屈指の名作であることは

⁴ 各作品の成立年代については、A.A.シャーフマトフ、C.A.ブゴフスラフスキイ、H.H.ヴォローニン、H.H.イリイン、L.ミューラー、H.И.ミリュコフら、おびただしい数の文献学者、歴史家のあいだでさまざまに論じられてきた。その概要は、福岡星児「ボリスとグレープの物語 訳および解説」『スラブ研究』第3号、1959年、101-110頁ならびに Милютенко Н.И. Святые ... による。詳細に立ち入らないが、ここでの判断は最新の研究書であるミリュチェンコの前掲書に多くを負っている。

⁵ «О убьении Борисовъ» из «Повести временных лет». Полное собрание русских летописей (ПСРЛ). Т.1. Стлб. 132-142; Franklin A. Sciacca. *The History of the Cult of Boris and Gleb*. Columbia University. 1985. P.104-113; 「ボリスの殺害について」『ロシア原初年代記』、名古屋大学出版会、1987年、149-162頁。

⁶ Милютенко Святые ... C.356-402; Sciacca. *The History* ... P.59-103.

⁷ «Въ тѣ же день съказание и страсть и похвала святую мученику Бориса и Глеба». Памятник литературы древней Руси (ПДР). XI-1-я половина XIIв. М., 1978. C.278-303; Библиотека литературы древней Руси (БДР) Т.1. СПб., 1997. C.328-251; Милютенко Святые ... C.386-316; Sciacca. *The History* ... P.3-33; 福岡星児「ボリスと...」、101-124頁。

⁸ «Съказание чудесь святою страсотърпщицу Христову Романа и Давида». Милютенко Святые ... C.318-345; Sciacca. *The History* ... P.34-58. なお②③④については拙訳がある。『電気通信大学紀要』第23号(通巻39号)、2011年、43-74頁。

間違いないであろう。それに対して、一部のディテールが捨象され、事件の経緯が簡潔で乾いた文体で報告されているのが①『年代記』である。いずれも情報の具体性がその特徴である。

②『説教』は中世ロシアの有名な文筆家ネストルによる作品であるが、具体性よりも、ビザンツ渡来の聖者伝文学の様式性が重視されている。事件の推移はつねに旧約聖書、新約聖書のさまざまな逸話や教説と関連づけられて描かれる。生まれつきの敬虔さを印象づけるエピソードによってその幼年時代を物語るというのも、東方正教会の聖者伝文学の典型的特長で、年端のゆかぬボリスとグレープ兄弟が聖なる書物に執着を示したり、貧しい者たちに熱心に施しをおこなったり、涙ながらに祈りをささげたりといったディテールが積み重ねられている。

②『説教』の後半部はボリスとグレープの死後におこった奇跡についての物語を扱っているが、これらの諸エピソードは④『奇跡についての物語』とかなり濃密な対応関係にある。二つの作品のあいだで、ほとんどのエピソードが重なっている。④は非常にしばしば③『物語』と抱き合わせで同じ写本のなかに相前後して収容されており、②の作品が③④に分離したとも見なせるし、③④の作品を合体させて②をかたちづくったとも見えるが、紙幅の関係上この議論には立ち入らない。

本稿では、これらの作品を比較対照しながら、ボリスとグレープが殺害され、列聖された経緯を追う。そのあと、これらの物語においてあらわれたディテールを検討しつつ、この事件がロシア史においてもつことになった意義を考察してみたい。

3. ことの発端—情欲と兄弟殺し

のちに「殉教」と捉えられたボリスとグレープの殺害事件は、ロシア・キリスト教の黎明期、1015年に起こった。この年からさかのぼること27年（988年）、のちに聖公と称されるキエフ大公ウラジーミルは、その卓抜した政治手腕によってルーシをキリスト教に改宗させたが、このウラジーミル公が身まかったのである。

彼の死はスヴァトポルクによって秘された。遺骸はじゅうたんにくるまれ、部屋と部屋のあいだの床板を引き剥がして、夜中に綱で地上に吊り下ろされた。床板をはがして遺骸を運び出したのはあきらかに呪術的行為で、床の穴はその後ふさがれたであろう。死者がこの世にもどることを阻むためである。スヴァトポルクがキエフ大公位につき、残されたウラジーミルの子どものあいだで激しい跡目争いがはじまった。

ことの発端について、『説教』と『年代記』、『物語』では異なった書き方をしている。

『説教』は聖書のエピソードを天地創造にさかのぼって描きなおすことから始まる。アダムとエバが創造され、知識の実を食べて楽園を追放され、カインとアベルが誕生し、兄弟殺しがお

9 たとえば、ウスペンスキイ文集（Успенский сборник XII-XIII вв. М., 1971. С.42-70）、シリヴェストル写本（Сказание о Борисе и Глебе. М., 1985. Т.1. Факсимильное воспроизведение житийных повестей из Сильвестровского сборника; Сказание о Борисе и Глебе. М., 1985. Т.2. Научно-справочный аппарат издания）がこうした例である。

こなわれ、神の慈悲によってイエス・キリストがこの世に送られ、キリストは受難をこうむって十字架にかけられて死に、地獄めぐりをして悪魔たちを打ち倒し、囚われた魂を解放し、三日後に復活して天に昇り、父なる神の右手に坐す。人間の原罪と救済の歴史が長々と語られる。

かくしてキリスト教徒たちが増え、偶像崇拜が衰え、ルーシにも福音が訪れる。「異教徒であるエウスタキウス・ブラキダス（2世紀ローマの殉教者）が鹿の姿をとったイエス・キリストに導かれて改宗したように、このウラジーミルにもキリスト教徒になるように神から啓示が現われ、その洗礼名をワシーリイといった¹⁰。この者はルーシにおいて第2のコンスタンティヌスとなったのである。」しかしながら、ウラジーミルの死後、「悪魔は神からロマン（ボリスの洗礼名）に恩寵とあらゆる人々にたいする慈悲の心があたえられているのを見ると我慢できなくなり、その年かさの兄スヴァトポルクのなかに入りこんだ。聖者の地上での生命を抹殺するためである。」

一方、『年代記』、『物語』では、スヴァトポルクはどのように描かれているであろうか。

『年代記』では、「ボリスの殺害について」の物語とは別の980年の項でスヴァトポルクの出生について書かれているが、それは『物語』の冒頭の記述とほとんど内容的に同じである。『説教』が大公家の体面を慮ってつとめて抑制された筆遣いであるのに対して、『年代記』、『物語』はほとんどスキャンダラスな暴露といってもよい語り口である。『物語』冒頭から当該箇所を引こう。

「事の発端を順を追って物語ることにしよう。ウラジーミルには、十二人の子があったが、それは一つ腹ではなく、彼らの母はさまざまであった。年長の息子はヴィシスラフで、そのあとにイジャスラフ、そして、三人目の息子がこの邪悪な殺害事件を企んだ張本人、スヴァトポルクである。彼の母はギリシア人で、かつては修道女であった。ウラジーミルの兄ヤロポルクはその顔の美しさに魅せられて、彼女を女子修道院から還俗させ、妻に娶り、この女にスヴァトポルクを孕ませたのであった。ウラジーミルは当時異教徒であったが、ヤロポルクを殺し、その孕んだ妻をわがものとしたのである。そして、この女は、兄弟である二人の父をもつ子、呪われたスヴァトポルクを生んだ。このゆえに、ウラジーミルは彼を愛さなかった。なぜなら、彼は自分の子どもではなかったからである。」

『年代記』、『物語』ともに、ボリスとグレープの殺害事件という兄弟殺しの発端は、異教徒であったウラジーミルの情欲にあると捉えている。あらためて『創世記』を読み返してみると、アダムとエバが「知恵の実」を食べ、性を知って樂園を追放され、カインとアベルを生み落としたのち、たちまち神に愛されなかったカインによる神に愛されるアベル殺しが起こっている。ここにあるのは、性と暴力が根底で密接に結びあっているという旧約聖書に特異な人間認識である。

いずれにせよ、三つの作品とも物語の基本構造となっているのは、父に愛されないスヴァトポルクによる父に愛されるボリス（とグレープ）殺しと、神に愛されないカインによる神に愛されるアベル殺しとの類比である。たとえば、『説教』では、「兄弟たちよ、第二のカインであるこの

¹⁰ 中世初期において、公たちのあいだで、世俗的な名前とキリスト教の名前、二つの名前があたえられる習慣があった。ウラジーミル、ボリス、グレープという世俗名にたいして、ワシーリイ、ロマン、ダヴィドというキリスト教名が対応する。

呪われた者スヴァトポルクの無慈悲さを見ただろうか」と嘆かれ、『物語』では、「人間の善をしんそこ憎む悪魔は、聖なるボリスが自らの望みをすべて神にかけているのを見ると、妬ましくなって、かつてカインに弟殺しをさせたように、スヴァトポルクを焚きつけた」と描かれている。第二のカイン、スヴァトポルクは、かくしてボリスとグレープの暗殺を企てる。

4. そして、ボリスは戦わなかった

話が前後するが、ウラジーミルの死の床にルーシに迫る危機が報じられていた。トルコ系遊牧民族であるペチェネグ人がルーシに侵入してきたというのである。『物語』によれば、「ペチェネグ人たちがふたたび軍勢を駆っていたところからルーシに攻めかかったのである。ウラジーミルは大いなる悲しみにあった。彼らに対して出陣することができなかったからである。このことは彼を大いに悲しませた。

そのときウラジーミルは、聖なる洗礼ののちにロマンと呼ばれていた従順なる至福のボリスをそばに呼び、彼の手にも多くの軍勢を預け、神をも恐れぬペチェネグ人たちに当たらせた。ボリスは喜び勇んで出陣するに際し、『私は父上の目の前で、父上の御心が望むとおりの働きをいたす覚悟でございます』と言った。

ところが、ボリスは出陣したが、敵を見つけることができずに引き返してきた。そこに彼のもとに遣いが来て、父の死について知らせた。彼の父ワシーリイは亡くなった、と。聖なる洗礼のあとは、ウラジーミルはこう呼ばれていたのである（『物語』）。

『説教』は、ボリスにあたえられた軍勢が八千人におよんだことを伝えている。ペチェネグ討伐のためにウラジーミルに託されたこの兵力をもって、ボリスはスヴァトポルクをはじめとするほかの兄弟を制圧し、自らがキエフ大公位に即くことができた。しかしながら、ボリスにはそのような野心がなかったのである。『物語』によれば、ボリスは今後の自分の身の振り方を考えるよりも、父の死を心から悼んだ。

「聖なるボリスはこの報せを聞くと、体から力が抜け、その顔は涙で濡れそぼち、すっかり涙まみれになって、言葉を発することもできなくなった。ボリスは心のなかでこのように考えた。

『なんということだ。私の瞳の光よ、私の顔のきらめきと輝きよ、わが若さの手綱を操る者よ、わが未熟さを導く者よ。なんということだ。わが父よ、わが主人よ。なんということだ。なんということだ。そこに私はいなかったのに、わが光よ、そなたは没した。私がある場に立会い、自らの手でそなたの敬虔なる体を清め、柩に納めることができたならよかったのに。』

『説教』は、父の死を知ったボリスがスヴァトポルクに対して恭順の意を示していたことを伝えている。「自分の兄スヴァトポルクが父の玉座についたことを聞くと、聖ボリスはよろこんで言った『スヴァトポルクこそが私にとって父となるのだ。』彼は邪気のない子羊のように自らの道を歩み、兄が何か悪事を企んでいるとは夢にも考えなかった。」戦国の気風が濃厚に残るロシア・キリスト教の黎明期において、ボリスの政治的判断は甘かったということになる。

しかしながら、『物語』では、ボリスはスヴァトポルクの害意を知ったうえで死、すなわち、「殉

教」の覚悟をしたとされている。「誰にこの苦い悲しみを打ち明けてよいのか、わからない。私が父のように敬っているわが兄であろうか。だが、私が考えるに、この者はむなしい俗事に心を碎き、私の殺害を企てている。もしも彼が私の血を流し、私の殺害を画策したとしても、私は主の御前で殉教者になるであろう。私は抵抗すまい。」

ボリス配下の兵たちは、スヴァトポルクを討つことを再三訴えるが、ボリスに拒絶し、ついに殺害される。

「従士たちが彼に言った。『出陣しましょう。お父上のキエフ大公位に即いてください。すべての軍はあなたの手中にあるのですから。』ボリスは彼らに答えて言った。『私は自らの兄に手を上げるようなことはできない。そのうえ彼は私より年長ではないか。私は兄上を父上と同じように敬っている。』

この言葉を聞いて軍勢はボリスのもとから四散し、ボリスは自分のお側の者たちとだけ取り残された。それは土曜日のことであった。困憊と悲しみのなかにあって、打ちのめされた心で彼は自分の幕屋に入り、心の深い悲しみに打ちひしがれて泣きはじめたが、魂は澄みきっていた。朝祷を終えると、主のイコンを見ながら祈りはじめた。『主イエス・キリストさま！この人間の姿をして地に現れ、自らの意志によって自らを十字架に釘で打ちつけ、われらの罪を背負って受難を受けた方よ、私もあなたのように受難を受けるにふさわしい者としてください。』

すると、突然、ボリスは幕屋に殺到してくる者ら、武具の輝き、抜き身の剣のきらめきを見た。そして、聖なる至福のキリスト殉難者ボリスの尊く慈悲深い肉体は、容赦なく刺し貫かれた。呪われたプチシャ、タレツ、エロヴィチ、リヤシコが彼を槍で突いたのである。ボリスは手傷を負って、幕屋からよろめきながら飛び出した。そして、彼は悲しみに満ちた眼差しと涙にぬれそぼち疲れきった顔つきで、自らの暗殺者たちを見ると言った。『兄弟たちよ、前に歩み出て、あなたがたに託されたことをおこなうがよい。兄弟たちよ、私の兄とおまえたちに安らぎがあるように。』

このようにしてボリスは自らの魂を神の御手にゆだね、7月24日、暦が8月に移る9日前、永久の眠りについたのだった。ボリスは不朽の王冠を受けて息絶えた。そして、彼の遺骸はヴィシェゴロドに運ばれ、安置され、聖ワシーリイ教会の土深く埋葬された。」

5. グレープはいかに葬られたか

中世ロシアのイコン画の伝統においては、グレープは中世ロシアの男子としては例外的に髭なしで描かれるのがふつうである。ロシア人は第二次性徴以前の、ほとんど幼いといってよい、いたいけな少年が殺されたことを記憶にとどめつづけたのである。これは重要な細部である。本節では、グレープの殺害がどう描かれているかを見てゆこう。

『年代記』によれば、スヴァトポルクは心中ひそかに「すでにボリスは殺した。どうしてグレープを殺そうか」と言った。『物語』はもっとつぶさにボリスの心中を描きだしている。「もしもこの殺人で私が思いとどまったならば、ふたつの運命が私を待ち受けている。私の兄弟たちがこの出来事を知ったら、私が行なったことよりもひどいことをして私に復讐するだろう。もしそう

でなくても、私を追放し、私の父の玉座を奪うだろう。なぜなら、私は神に愛された者を殺したのだから。無法に無法を重ねたのだから。」すでにボリスに手を下したスヴァトボルクは、もはや後戻りできなかった。

『年代記』、『物語』ともにスヴァトボルクがグレープを偽っておびき寄せたと伝えている。『年代記』から引用しよう。「そして、カインの考えを用い、企てをもってグレープに使者を送って、『急いで来なさい。父があなたを呼んでいます。父はとても病が重いのです』と言った。グレープは急いで馬に乗り、少数の従士団を率いて出かけた。彼が父に従順だったからである。ヴォルガにやってくると、野原で馬が穴につまづき、彼の足が少し傷ついた。彼はスモレンスクにやってきて、まだ暗いうちにスモレンスクを出発し、スミャジノ川の船のなかにいた。

このとき、父の死についての報せがペレドスラヴァ（ヤロスラフの母を同じくする姉妹）からヤロスラフのもとに来ていたので、ヤロスラフはグレープに使者を送って、『行かないでください。あなたの父は死んでしまい、あなたの兄はスヴァトボルクによって殺されました』と言った。

グレープはこれを聞いて涙を流して激しく泣き、父を思い、それ以上に兄を思って涙を流した。彼は涙とともに祈りはじめ、『ああ、主よ、私はこの世に生きるより兄とともに死んだほうがましです。…今となつては何のために私一人残されたのでしょうか』と言った。彼がこのように涙を流して祈っていると、スヴァトボルクからグレープを亡き者にするために送られた者たちが突然遣ってきた。」

『説教』においては、この期におよんでもなおグレープがスヴァトボルクへの信頼をいだいていたことを伝えている。「聖グレープはおつきの者たちに立ち向かわないように頼んだ。聖グレープは彼らに言った。『兄弟たちよ、私たちが彼らに立ち向かわず、私を捕らえるならば、彼らは私を殺さず、私を私の兄のところに連れてゆくでしょう。兄が私を見たならば憐憫の気持ちを催し、私を殺すことはないでしょう。』この聖人は、身の回りの者たちが自らを破滅させ、罪のない血を流さぬよう、彼らを守ろうとしてこう懇願したのである。聖人はみんなのかわりに自分ひとりが死ぬほうがよいと考えた。」

一方、『物語』の描き方はもっと生々しい。年端のいかぬ少年が暗殺者に囲まれて取り乱すさまが克明に描きだされているのである。「そして、彼がうめき泣き、涙で地をぬらし、何度もため息をつきながら神の御名を呼んでいると、突然スヴァトボルクによって遣わされた獰猛な彼の手先たち、凶悪な獣の魂をもった、血に飢え情け容赦ない残忍な兄弟殺しの者たちがあらわれた。至福の人は、自分の顔を涙でびしょぬれにして心を平静に保ちながら、心底からの深い悲しみに打ちひしがれ、恐れおののくようにため息をつき、涙をたくさん流し、身体からはすっかり力を失って、痛々しく懇願をはじめた。

『わが愛しき親愛なる兄弟たちよ、私に触らないでください。私に触らないでください。私はあなたたちに何の悪もなしていません。慈悲をもってください。兄弟にしてわが主筋の者たちよ、慈悲をもってください。私は私の兄とあなたたちにどんな侮辱をしたというのでしょうか。わが兄弟にして主筋の者たちよ。何か立腹させるようなことを私がしたというのなら、私をあなたがた

の公であり、私の兄であり主人でもある人のもとに連れて行ってください。私の若さをかわいそうだと思ってください。情けをかけてください。私の主筋の者たちよ。あなたがたは私の主人となってください。私はあなたがたの奴婢となります。命幼き私を殺さないでください。いまだ熟さない穂を刈り取らないでください。まだ母の乳にぬれたままの私を。成長しきらないけれども実りをつけた葡萄の蔓を切らないでください。』

そのとき、呪われたゴリヤセルがただちに彼を殺すように命じた。グレープづきの料理人でトルチンという名の者がナイフを取り上げ、至福の者をつかむと、罪のない無垢な子羊のようにグレープを刺し殺した。9月5日月曜日のことである。…グレープは殺され、荒野の2つの丸太¹¹のあいだに投げ捨てられた。」

グレープがいかに葬られたかについては、『年代記』、『物語』、『説教』ともに叙述は共通している。『年代記』では、『物語』とまったく同じように、「グレープは殺されて川岸の二本の丸太のあいだに捨てられた」と書かれ、『説教』では、「呪われた者たちは聖者の遺骸を運び出して、荒野の丸木のしたに放りだした」とされている。

荒野にうち捨てられたグレープの遺骸の後日譚は、『年代記』には「その後で（人々は）彼を取り上げて運び、それを聖ヴァシリイの教会の兄ボリスのそばに安置した」と結末だけが簡潔に描かれるだけだが、『物語』と『説教』ではそこにいたる詳しい事情が書き加えられている。その述べられかたは、両者で若干異なっている。

『説教』は聖者伝文学の様式性に則って次のように述べる。「(ヤロスラフは) このキリストを愛する公は聖グレープの遺骸を探し出すように命じた。人々は長いあいだ探索したが、遺骸は見つからなかった。その一年後、狩人たちが狩りをして歩いていたときに聖なる者の遺骸を発見したのである。遺骸は無傷のままで、獣に食らわれたり、鳥についばまれたりしていなかった。」

一方、『物語』は、グレープの埋葬は、スヴァトポルクを倒してキエフ大公位に即いたヤロスラフの主導でおこなわれたことを強調している。「聖グレープにかんしては、スモレンスク付近で殺されたということをみな知らなかった。そして、そのとき、かの地から来た者たちが荒野で光とろうそくが燃える火を見たと言っていることを聞いたと、人々はヤロスラフに伝えた。そして、これを聞くとヤロスラフはすぐさま『それは私の弟だ』と言って、スモレンスクに司祭たちを派遣して事の次第を究明させた。そして、彼らは幻が現われた場所でグレープの遺骸を発見し、十字架とたくさんのろうそくと香炉をもってその場にいたり、大いなる敬虔の念をもってグレープの遺骸を舟に載せ、ヴィシエゴロドに着くと、聖なるボリスの遺骸が安置されている場所にグレープを埋葬した。彼らは地面を掘り、そこにグレープを埋葬したが、人々はそれが美しくきわめて清浄なことを理解しなかった¹²。」

¹¹ 「丸太」は原文で «Колода» である。「Колода»を「丸太のなかをくりぬいてつくった柩」とする解釈（Срезневский, Словарь русского языка XI-XVII вв., Словарь древнерусского языка (XI-XIV вв.)) も存在するが、この見解は誤りである。このことについての論証は他稿を期したい。

¹² この部分は古くから議論されてきた。福岡星児邦語訳で「土を掘り、あらためて彼を埋葬したが、そのう

いずれにせよ、グレープの遺骸は荒野に放置された。これは何を意味するのであろうか。

6. 「残置された死者」と不気味な「奇跡」

いままでの研究者が見落としてきたことであるが、私たちはここでロシア民俗学の知見に答えの手がかりを求めなければならない。20世紀初頭に活躍した民俗学者 Д.К.ゼレーニンのロシア民衆の葬送儀礼についての考察が、一連のテキストに新しい光を照らしてくれるであろう。

ロシアの祖先にあたる東スラヴ民衆のあいだには古来、火葬、土葬とならんで、残置という埋葬方法があったことが、ゼレーニンによってあきらかにされている。太古の東スラヴ族は火葬がおもな埋葬方法であったが、キリスト教の導入以後、土葬に切り替わった。しかしながら、ゼレーニンがフィールドワークをおこなった20世紀初頭まで、「残置」の風習は根強く残存したのである。「荒野の二本の丸太のあいだに投げ捨てられた」グレープはまさに「残置された死者 заложные покойники」であった。それでは、「残置された死者」とはいかなるものであろうか。ゼレーニンの見解を質してみよう。

「19世紀はもちろん、20世紀に入っても、そのような死者は不浄で聖者にとって危険であると考えられて、通常のやり方では埋葬されなかった。基本的に、そのような者たちは、暴力によって殺された者たちや、ことに自殺者、さらに生まれたときに定められた年齢に達さずに若くして死んだ者らであった。」ここで、グレープは年若くして暴力的に死にいたらしめられ、その遺骸がうち捨てられたことを思い出そう。グレープは残置された死者の条件を過不足なく満たしていることがわかる。

さらにゼレーニンは次のようにつづけている。「ロシア北部では、そのような死者を「残置された死者」と呼んでいる。この名称は、死者が埋葬される方法、すなわち、地中に埋められず、粗朶をかけられて地上に残置されたことと関連している。東スラヴ人の非常に古い異教的な習慣は、『残置された死者』を地中に埋めないように要求していたのである。

東スラヴ人たちのあいだで見出されるのは、不浄な死体が地中に埋葬されることによって汚された大地が怒るという考え方である。なかんずく、怒った「母なる大地」は不浄な死体を受けつけない。そのような死者は、何度埋葬しようと思っても地上に戻ってくる。そのときに埋葬された死体は腐敗せず、このために夜ごと墓から這い出してさまよい歩くのである。『大地の怒り』の第三の兆候は、生きた人間にも感じるものである。大地は、蒔いたばかりの穀物の芽を枯らす春の寒さと寒の戻りによって、自らの怒りを表現した。このゆえに、太古の時代のスラヴ人たちは『残置された死体』を墓のなかには葬らず、遺体を人里離れた場所、たとえば、谷間や沼地に放置したのである。

るわしく神々しいばかりであることを訝った」とあり、シアッカの英訳で “They dug a grave in the earth and buried him there as well, comprehending not how it would be more honorable to do so.” となっている。いずれも意味を成さない。ここでは、グレープが「残置された死者」であることを踏まえて上記のように訳した。

しかしながら、埋葬の欠如といっても過言ではない、そのような類の不浄な死体の埋葬は嫌悪すべき結果をもたらした。ふつうの埋葬を拒絶された死者たちは、生きたる者たちに復讐をおこなったからである。彼らの復讐は穀物が実る夏に農民たちを脅かした。復讐の念に駆られた死者たちは、畑にやってきては穀物を枯らしたからである¹³。」

こうした「残置された死者」の例は、古い文献にも残っている。13世紀後半、ウラジーミルのセラピオンの説教はこうした冷酷な風習を非難して次のように述べている。「今、神の怒りを見て、あなたがたは考える。首吊りをして死んだ者や溺れ死んだ者を埋葬した者がいるが、自分自身が苦しまないように、もう一度掘り返そうと。なんというでたらめだ。おお、なんという不信心なのだ。」そのほか、16世紀前半の学僧マクシム・グレクの自らの著作でこの習慣を論難し、『アヴラムカ年代記』でも1159年に逝去したキエフ府主教コンスタンチンが「残置」による埋葬を望んだことが驚きをもって記されている。

「グレープの遺骸がうち捨てられた」ことをかたる『年代記』、『物語』、『説教』のいずれもが、グレープがあきらかに「残置された死者」だったことを証だてている。ここから、グレープがある種の「祟り神」として恐れられていたのではないかという仮説が成立する。

幼くして殺されたグレープが、腐敗して大地に帰ることができず、生き残った者たちに災厄をおよぼすのではないかという危惧が現実のものであった傍証として、『奇跡についての物語』、『説教』における奇跡譚にいくつかの不気味なエピソードが紛れこんでいることがあげられる。

聖者として認定されるためには、その生前ないしは死後に奇跡が起こったことが報告されるのが不可欠の要件であるが、ボリスとグレープにかんしても『奇跡にかんする物語』、『説教』をふくめて十におよぶ（数え方によるが）奇跡が報告されおり、それらの多くがふたつの作品で重なっていることは先般述べたとおりである。

聖ボリスと聖グレープを記念する教会が建立され、彼らのために祝日が制定される。その祝日にきらびやかな典礼と大規模な宴会が催され、惜しみなく喜捨がほどこされ、老若男女貧富の区別なく大勢の人々が集まり、奇跡譚がしだいしだいに流布していく。こうした奇跡の評判をたよりにさらに多くの人々が集まる。

奇跡はそもそもこのように、公一統とそれに近いルーシ教会の指導層によってつくられた側面ももっていた。このことは『奇跡にかんする物語』からも『説教』からも明瞭に読み取ることができる。奇跡譚は基本的にごくありふれたもので、『説教』で次のように述べられているとおりである。「自らの聖なる殉教者たちの力によって、神はこの場所で多くの奇跡を顕した。盲人たちは目が見えるようになり、跛を引く者たちは歩けるようになり、悪魔つきは清められ、さまざまな病気に罹った者たちは聖なる殉教者たちの祈りによって快癒を得た。枷をはめられたり、獄につながれた多くの者たちが解放された。」しかしながら、こうしたいわばスタンダードな奇跡のなかに、おやっと思わせるような妙なエピソードが紛れこんでいるのである。

¹³ Зеленин Д.К. Восточнославянская этнография, М., 1991. С.352-353.

まずは、聖ボリスと聖グレープの墓に不用意に近づいたヴァイキングたちに災厄が見舞う。「あるとき、ヴァイキングたちが地中に聖なる者たちが眠るこの場所にやってきた。そして、そのなかのある者がこの場所に足をふみ入れるや、お墓から炎が噴きだし、足を火傷した。」さらに、二人の聖者に捧げられた教会が炎上する話がつづく。「このあとしばらくして、聖者の遺骸が埋葬されている聖ワシーリイ教会が炎上した。人々がこの光景を見に集まってきた。教会は上部から燃え上がった。」

これらのエピソードはいずれも『奇跡にかんする物語』、『説教』の両方にあらわれる。また、次のようなものもある。聖者たちは貧しい寡婦に暴力をふるったというのである。「奴隷女で自らの女主人の命令で聖ニコラの祝日に仮小屋のなかで働いていた。すると突然、彼女のもとに聖なる殉難者が現われて彼女を脅していった。『なぜおまえは私たちの師父ニコラの日に働いているのか。このことで、私たちはおまえに罰を与えるであろう。』そして、こういい終えると、仮小屋をめちゃめちゃに壊して、女を死人のように打ち倒した。女はこのまま一ヶ月のあいだまったく身動きをすることができなかった。」

最後は『奇跡にかんする物語』のみが伝えるもので以下のとおりである。「ヤロスラフの子、スヴァトスラフが二人の聖者に捧げる石の教会を建立することを思い立った。そして、80 キュービットの高さまで教会ができたときに彼は死んだ。フセヴォロドがルーシ全土の権力を掌握し、この事業を完遂した。そして、教会の建設が終ったとたん、その夜に教会の屋根が崩れ、そのために教会全体が崩落した。このあと、フセヴォロドは平安のうちに死んだ。」

これらははたして神からの恩寵を受けた「奇跡」といえるのであろうか。柩から放たれる炎、やけどを負った無辜の人々、教会の炎上、ただけしい暴力、建立を発願した公の死、教会の崩落、これら度重なる事件や事故に当時の人々は不吉なものを感じなかったであろうか。ボリスとグレープの華やかな祝日のかげで、いわくいいがたい不気味な出来事の風聞がささやかれてはいなかったか。

こうした奇妙な奇跡譚を語り継ぎ、流布させた人々は、若くして、あるいは幼くして不幸な死を遂げたボリスとグレープが、この世に悪意をいだき、自らに災厄をおよぼすのではないかと、ひそかに恐れをいだいていたのではないだろうか。こうした恐怖が奇跡にまつわる物語にその痕跡を残したのではないか。

7. 列聖の歴史的意義—神話の書き換え

ここで本稿冒頭の問いに戻ろう。以上に見てきたとおり、ボリスとグレープはキリストへの信仰や徳高い生き方や学才に秀でていたわけではなかったが、ロシアで最初の聖者として列聖された。それはなぜであろうか。

それは端的に言って、年長の兄を尊び、抵抗することなく従順に死を受け入れたボリスとグレープの死にざまが、キリストに擬せられたからである。『物語』は、死を覚悟したボリスに次のように言わせている。「主イエス・キリストさま！この人間の姿をして地に現れ、自らの意志によ

って自らを十字架に釘で打ちつけ、われらの罪を背負って受難を受けた方よ、私もあなたのように受難を受けるにふさわしい者としてください。」

兄弟殺しであるという点では似通っているけれども、ボリスとグレープは『物語』のなかで言及されるチェコの侯ヴァーツラフとは決定的に違っている。ヴァーツラフはボヘミアのキリスト教化を推し進め、これに反対する勢力の頭目となった弟ボレスラフに殺された。これは一種のキリスト（教）のための死である。また、その死に方も剣を振りかざす弟から剣を奪って投げずるなど「騎士のように¹⁴」勇敢であった。ところが、これに比してボリスの死もグレープの死も力弱くみじめであった。

ここで、ウラジーミルがキリスト教を受け入れるときのエピソードを思い起こしてもよい。ウラジーミルはギリシア正教徒、カトリック教徒、イスラーム教徒、ユダヤ教徒のもとに調査団を派遣し、ギリシア正教の典礼が「天上にいたのか地上にいたのかわからない」ほど美しかったことに心を動かされ、コンスタンティノーブルからキリスト教を受容することを決意した。キリスト教の勝利を華麗に演出する儀礼の美しさがルーシの人々を捉えたのである。

しかしながら、考えてみると、儀礼の華麗さはあくまでことの一面にすぎないと気づく。その教義の本質には「神の子イエス・キリストが、人類の罪を背負って十字架の苦しみを受けて死んだのち復活する」という物語があったはずである。キリストは惨めな死をとげた。同様に惨めな死をとげた政治的敗者を一切の留保なくキリストに準えることは、キリスト教黎明期のルーシでもっとも有効で実践的なキリスト教理解のやりかただったと考えるべきであろう。

このように、ボリスとグレープはキリストのために死んだのではなく、キリストのように死を受け入れたがゆえに聖者として認められるようになった。ボリスとグレープのキリストとの同一視は、一歩まちがえば冒流になりかねない、かなりきわどいものだったともいえる。では、ビザンツ側がキリスト冒流の危険を冒してまでも、ロシア側にボリスとグレープをキリストと同一視することを許したのはなぜであろうか。

この問題を検討するには、イエスは神であり人であったとする正統派キリスト論と諸異端との長いながい戦いの歴史を想起する必要がある。アンティオキア総主教座（シリア）、アレクサンドリア総主教座（エジプト）の宗教的土壌から、仮現論（docetism）、養子説（adoptionism）、様態説（modalism）、単性論（monophysitism）、単意論（monothelitism）などの異端的思潮がつぎつぎと現われた。これらの諸説はほとんど一致して、キリストに「人」を見ようとせず「神」のみを認めようとするものである。正統キリスト教会はこれらを異端と認定し、カルケドン信経（451年）をさだめ、キリストにおいて神性と人性は「混合・変化・分割・分離せずに存在する」と結論づけた¹⁵。キリストは神でありなおかつ人であると明確に宣言されたのである。

こうしたことを踏まえると、ビザンツ教会の歴史は神と人とをあきらかに分けて考えようとするエジプト、シリア的指向性との戦いであったともいえる。やがてアラビア半島から両者を峻別

¹⁴ Федотов Г. Святыя ... С.49.

¹⁵ 泉治典、「キリスト論」、森安達也、「カルケドン信条」、『平凡社世界大百科事典』。

するイスラーム教があらわれ、これらの地域がキリスト教圏から退去してイスラーム圏に組みこまれること、さらにイスラーム教からの批判を受けて 8-9 世紀のビザンツ帝国で聖像破壊（イコノクラスム）の嵐が吹き荒れることはきわめて示唆的である。カルケドン信経に忠実であろうとしたビザンツ教会には、森安達也がのべるように、「神が人となられた以上は、人が神になる可能性もあるのではないか」という強い気分があった¹⁶。

イスラーム教と対決しておのれを保たなければならないビザンツ教会は、「神を人間化し、人間を神化する」という課題とつねに向き合わなければならなかった。まして、キエフ・ルーシの場合、さきに述べたように、カトリック、正教、ユダヤ教、イスラーム教の四つの一神教が競合したのである。コンスタンティノーブル総主教座は、キエフ・ルーシをイスラーム教に傾かせないために、キリスト冒流のリクスをはらっても、ボリスとグレープという人間を神にかぎりなく近いものとする必要に迫られたと考えるべきであろう。

じっさいその版図が半分以上草原地帯にあった（キエフ・）ルーシは、恒常的にイスラーム化の可能性をはらんでいた。キエフ大公はしばしば「カガン（可汗）」と呼ばれ（たとえば、キエフ府主教イラリオン『律法と恩寵について』）、草原世界の盟主であることが強く意識されていた。南ロシアの草原世界は、つぎつぎにイスラーム教圏に引き入れられていった。カマ川がヴォルガ川に流れこむ地（現在のロシア連邦共和国沿ヴォルガ連邦管区タートルスタン共和国付近）は 10 世紀前半イスラーム教に改宗したヴォルガ・ブルガール族に占められていたし、13 世紀にルーシを征服したキプチャク・ハーン国はヴォルガ下流域に盤踞して 14 世紀初頭にイスラーム化した。

さて、ボリスとグレープは、このように何の留保もなくキリストに準えられたわけであるが、はたして誰がこの臆面もないキリスト教理解を必要としたのであろうか。それはおそらく死地を勝ち抜いてキエフ大公位に即いたヤロスラフであったと思われる。

この頃のロシアは戦国の気風がきわめてつよかった。歴代のリューリク朝キエフ大公はことごとく非業の死をとげており、ほとんど「呪われた家系」といってもよいくらいである。年代記『過ぎし年月の物語』によれば、リューリクの息子イーゴリはドレヴリャネ族に無理な貢税取立てをおこない、返り討ちにされて死んだ。妻オリガは、イーゴリを殺したドレヴリャネ族を皆殺しにした。イーゴリ、オリガの息子で英雄的征服者だったスヴァトスラフは、ペチェネグ人に待ち伏せされて討たれ、その頭蓋骨は酒盃にされた。その息子ヤロ波尔クは弟のウラジーミル（聖公）に殺され、ウラジーミルの息子たち、ボリスとグレープは、本稿で見てきたように、兄スヴァト波尔クに殺され、そのスヴァト波尔クもヤロスラフに殺された。

激闘を勝ち抜いたたった一人の勝利者となったとはいえ、このような状況のなかで自分だけが安泰だと考えるのは、よほどおめでたい頭の持ち主である。賢公と謳われたヤロスラフは、この殺伐たる戦国の気風をなんとか鎮めることを生涯の課題としたといつてよい。凄惨な負の連鎖は、

¹⁶ 森安達也『東方キリスト教の世界』、山川出版社、1991 年、88 頁。

キリストの祝福によって断ち切れなければならなかった。中世ロシア社会は家父長をいただく父系家族制によって成り立っていた¹⁷から、年長者を尊重することから生まれる秩序も大切だった。キリスト教を実質化することが急務の課題であり、それには年長者への従順を守り、無抵抗のうちに死んだ政治的敗者をキリストに準え、列聖する必要があったと考えるべきであろう。

しかしながら、そこには大きな障壁が立ちはだかつてもいた。ボリスとグレーブ崇敬はあくまで政治的に造られたものであって、民衆のただなかから澎湃と湧きあがってきたものではなかったからである。民衆はまったくべつの態度で、のちに列聖されるこの二人の死者に対していた。ボリスとグレーブは若くして（あるいは、幼くして）非業の最期をとげたわけであるが、この悲劇が惹起する痛ましき、やり場のない感情のために、当時の民衆は彼らを穢れた死者と見なした。彼らを土に埋葬することによって、大地は怒って不順な天候をもたらし、大地に受け入れられない死者はこの世にもどって生者に復讐をすると恐れられた。

大地の怒り、死者の報復を恐れる負の感情は、ひたひたと当時の民衆の心に忍び寄り、それを支配しようとしていた。セラピオンが述べているように、恐怖に駆られて人々は墓をも暴いたのである。この感情の傾きは現代人にはなかなか想像がつかないが、きわめて根の深いものであったと考えるべきであろう。兄弟殺しとならんで、この「祟り」への恐怖こそが、人類の贖罪にすべてを捧げたイエス・キリストの祝福によって乗り越えられなければならなかったものである。福音書にあらわれるイエスは、つねにこうした虐げられた者たちのかたわらにおられたではないか。祝福と祈りが切実に求められたからこそ、列聖が必要だったのである。

「若さにもかかわらず痛ましい殺され方をしたボリスとグレーブが不浄なものとして大地に受け入れられず、この世に戻って害悪をもたらす」という神話（A）は、列聖によって、「年長者への服従を貫き、無抵抗でひたすら祈ったことで彼らが神に好まれ、祝福され、天上の王国にいる」という神話（B）に置き換えられた。この（A）から（B）への神話の転換を可能にするのは、キリストをとおしての絶えざる祈りにほかならなかった。その一方で、もともとの恐怖は聖者への畏怖としてなお残存することになった。意識下にもぐったこの畏れが、政治的敗者の列聖というロシア的伝統の根底にあるものであろう。

もうひとつ重要なことは、『年代記』、『物語』ではっきり示されているように、この事件が旧約聖書『創世記』の真理の発見という性格をもっていたことである。性と暴力が人間の奥底でじつは近接した関係にあり、兄弟殺しという救いがたい悪行の源泉が情欲であるというきわめて旧約聖書的な認識が、当時のルーシの人々に「発見」されたのである。『創世記』のエピソードにあわせて物語を拵えあげたのではけっしてない。ボリスとグレーブの殺害事件に接して、キエフ・ルーシの人々は聖書にこそ真理があることにあらためて驚嘆したであろう。

これを別な側面から捉えると、ボリスとグレーブの列聖は、原罪（情欲と兄弟殺し）が無垢なるもの（キリスト、ボリス、グレーブ）の犠牲によって救済されるというキリスト教の基幹神話

¹⁷ ヤーニン『白樺の手紙を送りました』、山川出版社、2001年、153-156頁。

を描きなおすことにほかならなかった。ボリスとグレープを祝福し、彼らに祈りを捧げることは、この基幹神話をその都度ごとに生きることだったのである。

ヤロスラフ賢公の治世下におこなわれたキリスト教の内面化の試みは相応の結果を取めたと考えられる。その後も兄弟どうしの争いは絶えなかったが、殺し合いに発展する事例は激減したからである。14世紀初頭従兄弟とまた従兄弟がウラジーミル大公位をめぐってあらそったトヴェーリとモスクワの抗争¹⁸まで、ロシア史に凄惨な「兄弟殺し」は存在しなかったのではないか。

最後に、聖ボリスと聖グレープ崇敬がロシア王権にあたえた政治的效果について考察して本稿を締めることにしよう。

アレクサンドロス大王にも比せられる英雄的征服者、スヴァトスラフ（945 頃-972 年）は、キエフ・ルーシの支配領域を飛躍的に拡大させた。その領土と人を束ねる原理として、その子ウラジーミルは一神教を必要とし、四つの一神教のなかからギリシア正教を受け入れたことは先述したとおりである。ここに宇宙に唯一の神の、地上における代理人たる君主というロジックが成立する。じっさい、キリスト教がキエフ・ルーシの諸部族を束ねる統合の原理となったことはたしかであると思われる。

しかしながら、この思考には落とし穴もある。コンスタンティノープルにビザンツ皇帝が君臨している以上、キエフ大公はモスクワ大公とは異なり、「地上における神の代理人（アウトクラートル、サモジェルジュツ）」とはなりえない。先に述べた統治理念のロジックは揺らぎをかかえざるをえなかった。この不安定さを補完する働きをしたのが、ボリスとグレープ崇敬であったと考えられる。ボリスとグレープがルーシで最初の聖者と認定されることで、キエフ大公家（リューリク朝）は聖者を輩出した血族として神聖化されることになった。キエフ・ルーシの伝説時代（9世紀なかば）からイワン雷帝の息子フョードルが亡くなる（1598年）まで、ロシアではこの血族に属することが最高権力者の要件となったのである。

8. まとめ

ボリスとグレープに捧げられた作品は中世ロシアにおいて例外的に多い。『物語』が170以上の写本に、『説教』が30の写本に残されている。不幸な死を遂げた二人の若者に対する同情が、中世ロシアの圧倒的な世論であった。ボリスとグレープの列聖は、キエフ・ルーシのキリスト教受容を後戻りのきかない地点まで進展させる、大きな歴史的意義を有する事件であった。彼らを崇敬することによって、キエフ・ルーシはビザンツ教会圏に踏みとどまることになったといっても過言ではない。ボリスとグレープ崇敬の本質は、若くして殺された無辜の者たちのいわば「祟り」の威力を、キリストの祝福と祈りによって守護の力に変えることにあった。この畏怖を背景として、年長者への従順をつらぬいたボリスとグレープは、家族関係一般、ひいては国家安寧の守り手として、リューリク朝の枠を超えてロシア民衆にも篤く崇敬されるようになったのである。

¹⁸ 三浦清美『ロシアの源流』、講談社メチエ叢書、2003年、40-112頁参照。